



TITLE:

田島先生を追憶する酒の話三つ

AUTHOR(S):

神戸, 正雄

CITATION:

神戸, 正雄. 田島先生を追憶する酒の話三つ. 経済論叢 1934, 39(2): 280-282

ISSUE DATE:

1934-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130482>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號

第 三 十 九 卷

昭和九年八月一日發行

哀 辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論 叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時 論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記 事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬 神戸 正雄
河田 嗣郎 本庄 榮治郎
汐見 三郎 黒 正 巖
谷口 吉彦 山本 美越乃
田 島 昌太郎
順 田 島
財部 靜治
大國 壽吉
石川 興二

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

田島先生を追憶する

酒の話三つ

神戸 正雄

(一) 田島先生の逸話は大概、酒と關係を有つ。先生は、酒を好み、酒を友とし、酒を生命とせられた。壯時には可なりの酒量であつたが、晩年には餘程、節酒せられた。けれども酒なくして何んの人世かなといふ氣持だけは、何時までも持ち續けられた。其れほどとは思はなかつた私は、其誤解から、いたく先生の御機嫌を損じた事がある。それは忘れもせぬ先生退官の直前の年首に、經濟學會恒例の新年宴會を、日本酒本位の純日本式の其れから、酒拔きの質素な會へ改めてはどうかと發案した。處が先生は直ちに起つて之を反

駁せられ、私も其爲め案を撤回した。其折り、先生は酒を飲まぬ位ならば生き甲斐はなしとまで絶叫せられた。酒が如何に先生の生存に重い意義を有つて居つたかを伺ふに足る。

(二) かほど先生を怒らしたところある私も、其原因となつた酒につきては、嘗て短い時の間ではあつたが、先生と飲み仲間であつたことがある。そして先生と酒量を争つたことさへあるのは、私にとりての良い思出である。私は長く、酒をあまりに飲まぬやうにして居るが、實は若き時には盛んに飲んだものであり、又、飲み得たのである。明治三十六年頃、先生と一緒に名古屋地方へ講演に往つたときの事、先生と旅先きで飲み競べをして、到頭、私の方が先生を負かしたのであり、それで先生は酒好きではあつたが、酒量は左程でもなかつたやうに思ふ。先生は酒を友として、一生信義を完くせられたが、私は此友人をば早く棄てて顧みなかつた譯である。

(三) も一つ酒が先生の命を取らうとした話があ

る。其は例の澤柳事件の時であつた、同氏が京大に總長となつて来るや、各科の教官を諭旨退官させた。文理醫工に亙りて此厄に遇ふた人は少くなかつた。獨り法經からは一人も之を出さずして濟んだけれども、實の處、澤柳氏の當初の腹の中では、法經からもといふのであつた。當時、同氏が教授の退官を迫まるや、本人へ先づ迫まつたのではなく、豫め、其と縁の深き學科相當の他の同僚に同意を求めた。其同意を得た上に本人に退官を迫まつた。其同僚の同意は他の科では凡べて滞なく得られたさうだ。處が經濟にては少くとも私が之に同意を與へなかつた。其爲めであつたか何うだか、澤柳氏も經濟に關する限り斷行をしなかつた。當時、澤柳氏が私に、告げた處では、先生が酒に溺れて居られるの理由を以て、先生を斥けやうとしたのである。私は酒が先生にとりての一の小さな缺點ではあるけれども、又、先生には、先生にして初めて能くする所の長所もあるからといふ事で、極力、澤柳氏に抗議した。私は其後、二十年間、屢々先生の逆鱗に觸れ

追憶文

たのであるが、此時ばかりは、先生から喜ばれたのであり、私の一生中にも、是れほど嬉しかつた事は稀である。兎に角、先生の一生には酒が形の影に伴ふ如くに着き纏つた。酒は先生の一生を楽しくもしたであらうが、併し、恐らく大分、損をせられた事もあつたやうに思ふ。